

地域発信のアートイベントの美術教育運動としての可能性

—イベント東海道中てらしまつりを通した DBAE ベースの地域教育活動の可能性について—

Possibility of Art-related Events in Local Areas to Promote Art Education:

Possibility of Local Educational Activities Based on DBAE Including
the Event of Tokai Road Lighting-up Festival

佐原 理
Osamu SAHARA

要旨：

地域活性のためのアートイベント「東海道中てらしまつり」は平成18年9月に豊川市にある、国の天然記念物、御油の松並木で初めて開催され、筆者は企画メンバー、アーティストの1人として参加した。このイベントが地域の活性化につながり、さらには生涯教育の観点から地域文化レベルの向上につながるべく在りたい。そのためには、このイベントを地域交流の活性化の中心と捉え、市民に新しいかたちの美術を鑑賞する機会とするとともに、一過性のイベントとして終わらせず、持続可能性のある地域活性のためのイベントとして位置づけられなければならない。地域文化振興のための美術教育という観点からこの「てらしまつり」考察すれば、作品を鑑賞する際のガイドブックの作成や、新しい美術の概念を伝える作業が必要であろう。それによって鑑賞者がより深く美術作品を鑑賞し愛好する心情を育む事につながるのではないか。そして、この活動が、松並木の遊歩道計画の推進につながる事を期待したい。こうしたイベントは様々な地域で同時多発的に、かつ持続的に派生しなくては美術ムーブメントとして存在し得ない。アメリカの全米美術教育協会 NAEA が提唱した Discipline Based Art Education を基にした美術教育的アプローチを効果的にもちい、作家、美術キュレーターのみでなく、美術教育関係者がより多く携わっていく事で効果的に20世紀以降の現代美術と称される作品群の招いた世相との美術概念の理解の度合いの格差の解消につながると期待したい。

Abstract:

"Tokai Road Lighting-up Festival" was held to promote cultural possibilities of Higashi Mikawa Area along the avenue of pine trees, which is national treasure, in Toyokawa-shi in September 2006. The writer participated in this event as a director and an artist. It was our hope that it would be effective in developing cultural awareness from the viewpoint of lifelong education. From the viewpoint of lifelong education, there was a need for a guidebook to facilitate appreciation of artworks and to promote understanding of the new quality of artworks based on the idea of Discipline Based Art Education. It was hoped that the viewers would be able to enjoy artworks in a deeper sense and would be able to associate art as a part of culture. This community-based event was not and will not be held by one individual or

group alone. It would rather be as a part of the art movement and development of the area. As such it will contribute to solving problems of people having difficulty in understanding modern art works after the 20th century. There is a necessity for not only art curators but also people from the art education field to promote local cultural activities.

キーワード：イベント, DBAE, 生涯教育, 現代美術, 美術教育
event, DBAE, lifelong education, contemporary art, art education

はじめに

近年学校教育の中で扱う美術教育と、実際の社会の中で培われている美術との格差が問題の一つとして取り上げられている。義務教育の中で最高教育機関である中学校の文部科学省学習指導要領には、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的能力を伸ばし、豊かな情操を養う。」¹⁾とある。しかし、表現中心の教育活動であるため鑑賞への配慮が少なからず不足していた状況であった。近年様々な美術館の活動により、学校とコミュニティが連携をし、コンテンポラリーアートと括られる作品群を鑑賞する機会を得られるようになってきた。美術は表現だけの教科ではなく、生涯教育の観点からも美術を文化として捉え、その歴史や美的感性に親しみを持つことが地域の文化を向上させる。そしてそれらの活動が我々の人生に良い刺激を与え美術を通じた人間環境教育につながる事を期待したい。そのためにはより良い感性をもち、より深く作品を楽しむための分析、理解の能力の育成が地域の美術教育活動の要点として必要である。

上記の流れから、コンテンポラリー芸術を文化の一環として市民の美術を愛好する姿勢を育みたい。美術館では収蔵が難しい、市民には新しいスタイルの美術を発表する機会が必要であった。そこで、筆者はイベントという発表の方法をもって、その架け橋とする事を想起した。90年代の混沌としていたアートシーンの中で、世界的にイベントという発表の形が形成されつつある。本論では愛知県東三河のアートシーンを参考に、美術界の動向をとらえる。さらに、美術の生涯教育の観点から「東海道中てらしまつり」を取り上げ、National Art Education Association が提唱し、現在では全米のナショナルスタンダードにも取り入れられてい

る Discipline Based Art Education (以下 DBAE と表記する) の一部を基にイベントの教育的価値の可能性を考察したい。

1. 美術教育の焦点

日本の美術教育はこどもの事を考えたこどものための情操教育である。それに対して、アメリカ型美術教育は教師のための教師用のカリキュラムである。DBAE を取り入れ、定着したアメリカのナショナルスタンダードには、教師のための授業用ガイドライン的側面が見受けられる。それをベースに多くの州がさらに詳細な DBAE をベースとした州のスタンダードを設けている。これは、全米におけるチャイルドセンタード美術教育の問題点、つまりは、教師の指導力の曖昧さや、先天的構成能力や、描画能力の優れたこどものみが良い成績を収めるなどに対する打開策として推進された運動の末、現在に至っている。

一般論として、美術教育の焦点はこどもと教師だけでは無い。地域のための美術教育が生涯教育などの枠で考えられている他、こどもと地域を結びつける美術館と学校との連携教育などが盛んに育まれている。

近年のアートイベントなどでは、その地域の中で野外や都市空間を会場とし様々な新しいアートシーンをつくりあげている。しかしながら、それらのイベントは町おこしやアートと商業を関連付け地域の活性化のための1つのアイデアとして育まれている場合が多い。そこで、地域で盛んになりつつある美術を通じた地域活動であるイベントを教育的視点から価値あるものにするために、筆者が企画した下現代美術を中心としたアートイベント「東海道中てらしまつり」を実例に具体的に考察したい。

2. 生涯教育の観点から、美術の観点別のクオリティーを考察する

DBAE セオリーをベースにすると以下のようなクオリティーが選出される。

- A literal quality ----- 写実性の良さ
- B Formal quality ----- 様式性の良さ
- C Technical quality ----- 技術性の良さ
- D Expressional quality ----- 表現性の良さ
- E Functional quality ----- 機能性の良さ

いずれの項目も美術作品を鑑賞、または使う際の観点別クオリティーを代表するものであり、これらの値の組み合わせによって作品の良さが現れる。ただし、これらの数値が低いからといって作品の善し悪しが決まるものではなく、あくまで、ある1つの作品がどのような特性、良さを兼ね備えているかを判断する基準である。

A-E が19世紀までの美術の基本となるクオリティーである。しかし、20世紀以降のコンテンポラリー芸術作品と大まかにくくられる一連の美術ムーブメントに属する作品ではこれらのいずれの良さもまるで無い作品が存在する。その為に、鑑賞する市民の側も混乱する場合が多い。そこで、新たにこれに加え F として Conceptual Quality? 概念性または発想・観点性の良さを付け加えることを提案したい。20世紀美術では多くの新しい主義や表現方法が介在した。それらの多くは新しい概念によってもたらされ、それらの概念を理解する事によって初めてその良さが理解される形態の作品が多く生み出された。その良い例として、20世紀美術において草創期に属すると考えられる作家にマルセル・デュシャンがいる。新しい概念の作品の例として、1917年にデュシャンが制作した「泉」という作品がある。この作品はレーディーメイドという主義に属し、それは既成の製品群を用いて新たな意味付けをし、再生するという、分解と再構築を特徴とする主義である。デュシャンもまた男性用の小便器を「泉」と題して美術館に展示したのである。この作品は A-E のどの良さも欠落しているといえる。なぜならば、写実性も、様式性も無く、技術性も既成の製品を使っている事から技術は必要としない。さらに表現性などは伝わってこない。そして美術作品としての機能性も見受けられない。しかし、この作品には概念性、発想・観点性の良さがある。デュシャン自身は作品について多くを語

らなかった作家であるが、一般的には小便器を美術館に設置する事により、『美』という既成概念の危うさを形而下とすることがデュシャンのコンセプトであったと言われている。つまりは我々現代人の『美人』と平安時代の『美人』がまるっきり違うように、現在の美術館にある美術作品が本当に美しいものであるのかどうか、その危うさを示す作品だったのである。デュシャンを始め、現在では多くの作家がこのような概念の良さを表現の1つとして求め制作活動をしている。さらにはアンフォルメル、抽象表現主義、ミニマルアート、パブリックアート、ネオポップ、オタクなど様々な系統化された表現形態が出現した。DNP Museum Information Japan の Art-Scape 現代美術用語集を参考にすると、現代美術の運動・動向・様式は200程ある事がわかる。それらの新しい観点を考察しまとめる事が急務であるが、このように我々は区分けされたそれぞれの美的観点が折り重なって数多くの作品の良さを感じ取るのである。そこで作品をある程度分類し系統付けし楽しみ方を指し示す必要があるのである。

3.1. 「東海道中てらしまつり」というイベント

平成18年9月9日に愛知県豊川市御油町にある天然記念物である御油の松並木で「東海道中てらしまつり」がおこなわれた。時間は午後6時～9時までの3時間。企画運営はトヨカワヤングクラブ（以下 TYC と表記）が担当し、共催には豊川市観光協会、御油発展会協同組合がついている。筆者は TYC に所属し、このイベントの企画を担当した。TYC は主に豊川市の御油町に在住する若者によって構成された NPO である。

「東海道中てらしまつり」の目的は、国の天然記念物、御油松並木を竹の灯籠と照明でライトアップし、その空間で地元若手アーティストによる作品展示や演奏により癒しの空間を演出する事である。さらには、松食い虫や排気ガスで大きなダメージを受けた松並木の事を考え、大規模な保護を訴える足がかりとする目的がある。将来的には松並木を遊歩道化し市民の憩いの場としての利用を促す意図がある。

会場である松並木は400年の歴史を有し、古くから御油宿と赤坂宿をつなぐ道として親しまれてきた。約600mある松並木は、街道を行く人々を、夏の暑さや冬の強風から守るため江戸時代に幕命により植えられたもので、604年から11年かけて約160本が植えられた。現在では旧東海道として国道1号線を迂回する車や地元住民にとっての主要道路であるため、非常に

交通量が多い。遊歩道が設けられていない上に道幅が2m50cm程と狭いため松並木を通る歩行者はあまり見受けられない。そこで再び人々が松並木を鑑賞してたのしみ、人々が集う空間として在るために、アートを原動力にコミュニケーションの活性化を図った。

イギリスのホワイトチャペル地区のアートによる経済復興や、メキシコのティファナ地区の経済復興例など世界の様々な箇所でもアートによる街の活性化の実例がある。東三河の地域に限っても豊橋水上ビル地区でおこなわれているSEBONEや、豊川江島橋付近でおこなわれている江島橋野外美術展、宝飯郡音羽町でおこなわれていた宮路山野外美術展、豊橋市伊古部海岸でおこなわれていた表浜野外美術展など、活発に野外や都市の中で美術展が育まれている。「東海道中てらしまつり」もこういった枠組みのなかの一つとして機能するものとし、地域社会とより密接に結びついた美術運動として位置づけたい。

3.2. てらしまつりに参加するアーティストの選出

アーティストとして、愛知県で活躍する30代までの作家を起用した。若く新しい作家をもって新しい感覚でイベントを遂行するという主催者の意図がこの背景に存在する。アーティストは映像、立体、書、パフォーマンス、メディアアートと幅広く野外での活動に発展できる可能性のある領域を扱う作家を選定した。以下に実際に行われた活動を表記する。

a. 犬飼美也妃

犬飼美也妃のパフォーマンスは来場者の住所を伺い、それを葉に印し、一旦彼女の全身に住所の書かれた葉をピンで留める。全身にそれが満たされると、来場者とともに葉に書かれた場の名前を読み上げながら吹いて飛ばす。人々が集いそして離散していく交流の場である松並木という場を強く意識したパフォーマンスである。(図1参照)

b. 佐原理

佐原理の作品は来場者が所定の竹によって設けられた儀式の場に入る事で、場に入った事をモーションセンサーが察知しシンセサイズされた音が発せられ、自己の存在を告知をする場という意義がある。さらには手を叩くという行為によって音センサーにより更なる音が発せられ、来場者の行為が音となり波及されていく。異世界への入り口の場であり、行為が波及し変換され巡り戻ってくる輪廻を意識し設置した。

(図2参照)



図1. 犬飼美也妃のパフォーマンス



図2. 佐原理のインタラクティブアート

c. 大島有香子

大島有香子は野外にてパフォーマンスとしての書を体現した。2畳分の台紙に隆々とかかれる線や緊張感ある造形は光をメインとした展示のなかでそれらの作品を設置し、よりその要素を強調し野外における平面的造形を光によって、いわば、即興的インスタレーションにより空間的、立体的空間を演出した。(図3参照)

d. 新實 広記

新實 広記は 雨粒のような豆ガラスを幅2m、長さにして15mほど敷き詰めた。素材のもつ美しさと素材のもつノスタルジックさ、光の反射により幻想的な空間を演出した。ガラスを触らせるという来場者とのインタラクションを意識しており、鑑賞するだけでなく触り、遊ぶという意図がある。また豆ガラスを投げたり踏みしめたりする事により発せられる音を楽しむことも意識している。(図4参照)

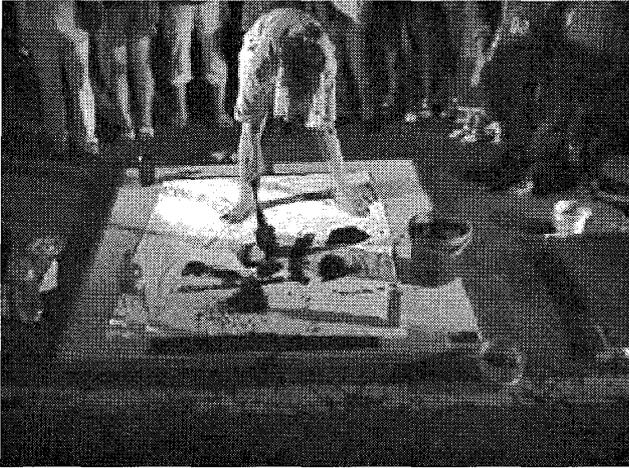


図3. 大島有香子の書のパフォーマンス

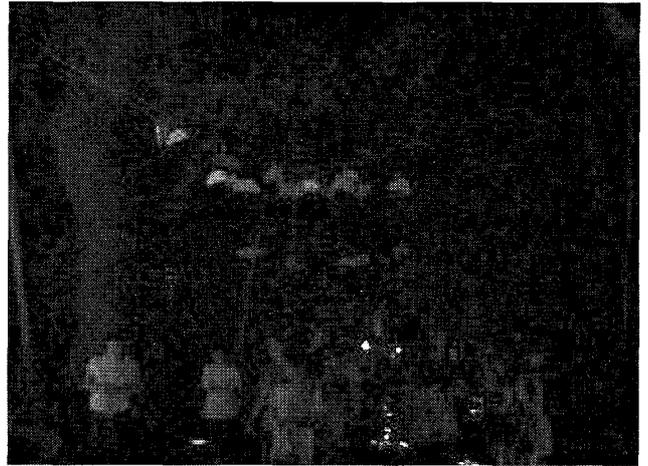


図5. 福間紘子の鳴子型インスタレーション



図4. 新實広記のガラスのインスタレーション

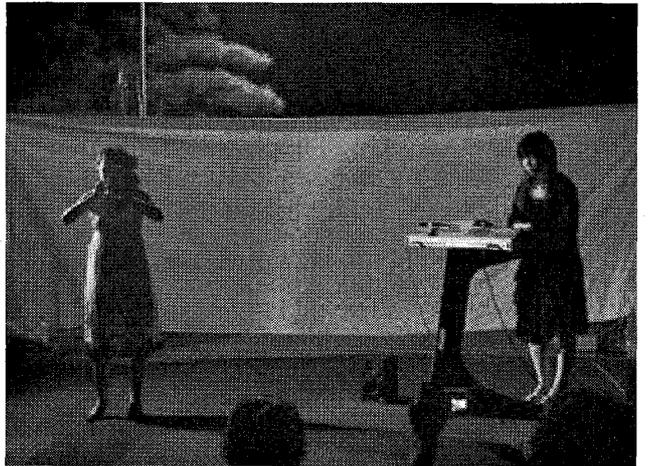


図6. 桐山・松尾の環境音楽の演奏

e. 福間紘子

福間紘子は松葉の形状を意識し加工された木を鳴子として設置した。鳴子からは紐が吊るされており、来場者はそれを引っ張る事によって鳴子とのインタラクションをもつ。頭上に設置された結界としての鳴子は、空間のなかで立体的に音と視覚からその結界という意図を伝える。上方に設置された鳴子は空間の広がりにより意識させ、道路を使う作品が多い中、より大きく空間を使った作品となっていた。(図5参照)

f. 桐山佳子, 松尾くみ

桐山佳子と松尾くみは野外においてシンセサイザーと竜笛により環境音を取り込んだ環境音楽を実践した。具体的には四季をイメージした音をそれぞれの季節に合わせて用意し、それに合わせて竜笛とシンセサイザーされた合成音により、音楽演奏というよりは音による空間演出という趣旨でのパフォーマンスである。さらには四季に合わせた童謡の演奏をおこなった。幕

のうらには佐原による季節に合わせた映像作品の上映も同時におこなわれた。(図6参照)

3.3. 相互作品の関連付け

以上の計6名を「東海道中てらしまつり」を構成する作家として選出した。1つの空間を演出する効果として、作品をそれぞれバラバラになる事なく、統一する必要があった。しかし、企画の段階で作家に作品への課題を出す事は、作家の自由な発想を妨げるものとして敬遠した。それぞれの作家の作品を尊重しつつも松並木を1つの空間としてとらえ、人の行き交う場所を前提とし意義在る作品構成となるよう工夫が必要であった。夜間のイベントのうえにまつりという名称もあり、イベントの質を土俗的、風土的なものにする必要があった。宗教的な色を出す事ではなく、よりアニミズム的に自然と人が畏敬し合い共存する世界観を演出する事が目的となった。てらしまつりでは600mあ

る松並木を一つの世界として捉え、人々が集い、日常とは異なる新たな空間、世界を演出する事で、人々が松並木という場所の魅力を見出しその良さを伝えていく1つの文化的活動とした。

一連の流れとして、松並木を巡る世界を1つの大きな装置として演出し、異空間への探訪と輪廻というコンセプトを設けた。まずは佐原の作品により礼拝の儀をすませ、来場者は日常とは切り離され、ある種異様な音が鳴り響く空間へと誘われる。そこから広がる音は竹の照明と共に広がりをもって次の福間の作品へと構成される。福間の作品では大きく張られた縄と、それに連なる鳴子によって大きな結果を構成し異空間への門の役割をする。そこから広がる空間では松並木の照明により、広がりある空間世界を探訪する。その奥には案内役とも言える犬飼のパフォーマンスが存在する。収束と解放というコンテクストは来場者の存在の意識をより明確にさせ、さらにそれを異空間で解放する。やがて大島の書によるインスタレーションは意味的要素を排除された文字により要素として空間を演出し、より複雑なバランスの均衡を保ち現在社会の意味的インフォスフィアを否定する。その先にある新実の拡散された光のオブジェクトは、空間にある光を要素に変え有形の可視光線として空間を演出し、光に包まれたその場をある種の癒しの空間として演出する。そして最後に桐山、松尾による環境音楽により、意識は自然の空間へと誘われ現実空間を意識させるものとして帰還の役割をなす演出となっている。こうした関連付けをもって松並木を一つの大きな異空間への探訪と輪廻の装置と定義し、意識の清廉のための儀式、ヒーリングのための場として演出した。

4. アンケートの結果からの考察

「東海道中てらしまつり」では3000以上の参加者に対して回答数100人のアンケートにご協力いただいた。アンケートの質問事項は、今後の検討課題である、松並木の遊歩道化に向けた第一歩として、参加者の意識調査をする事が第1の目的であった。さらにはイベントに対する楽しみ方、どのような作品が人気であるのか、イベントを続けて欲しいかどうかなどの意識調査をした。アンケートの質問事項を以下に記載する。

- (1) てらしまつりに参加してどのような感想を持ちましたか？
- (2) てらしまつりで印象にのこった作品は？

- (3) 心に残ったアーティスト、作品はありますか？
- (4) てらしまつりを今後続けることに賛成・反対ですか？
- (5) 将来松並木が遊歩道化になる事について賛成ですか、反対ですか？
- (6) その他のご意見

アンケート調査をした結果それぞれの質問項目に対し以下のような結果が得られた。

- (1) てらしまつりに参加してどのような感想を持ちましたか？
- A すごく良かった
- B 良かった
- C 普通
- D つまらない

(図7参照)

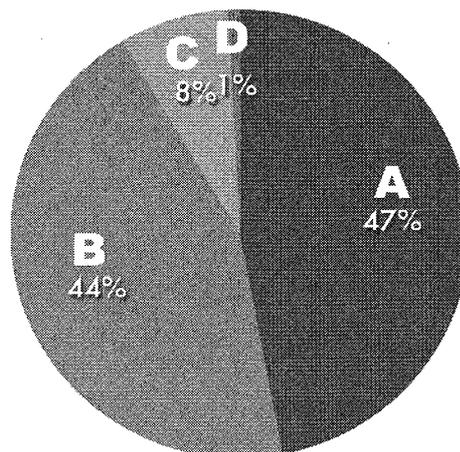


図7. てらしまつりの感想

アンケートの結果として図7のような結果を得た。AとBを合計すると91パーセントが好意的にこのイベントをとらえている事がわかる、それに対して10%の来場者は好意的な印象を持たなかったようである。明確な否定的評価はわずか1%である。

- (2) てらしまつりで印象にのこった作品は？

演奏

- ・楽器での演奏
- ・思っていたよりも立派で竹のあかりや音楽にいやされた
- ・シンセサイザーの演奏と照明
- ・音楽の演奏と松並木の雰囲気よかった

- ・音楽、パフォーマンスがよかった
- 竹のオブジェクト**
- ・光がきれい
 - ・ライトアップのアイデアが良かった
 - ・竹筒の灯もいいけど、横に光が放さないのので光が乏しく見える
 - ・金魚の竹筒がとてもかわいい
 - ・工夫された灯の明かり
 - ・竹ライトがおもしろい
 - ・ろうそくだけでなく、金魚やライト、お香など色々なものが入っているのが良かった
 - ・色のついた明かり
 - ・光の色合い
 - ・竹を低く切ったものがきれいだった
 - ・灯火の演出が初回にしては大変良かった
 - ・光のやさしさ
 - ・たくさんの竹のオブジェの光が良かった
 - ・足下のライトアップ

新実

- ・道にひいてあるビガラス玉
- ・道路に敷きつめたガラスビーズの照明
- ・はじきの足ふみ
- ・おはじきの道

佐原

- ・手を叩いて青の出る装置はびっくりした
- ・手を叩いて音の反響のするものが楽しかった
- ・石の上で手を叩くと響くのが良かった
- ・演奏の後ろのプロジェクター映像が古いイメージのもの（てらしまつり）との一見ミスマッチに思えるものが、光と影という点でマッチしている

福間

- ・松の形のカランカラン
- ・紐で木を鳴らした。思ったより音が沢山で驚いた

犬飼

- ・35人の来た場所を聞いて、葉っぱに書き、その場所をいいながら吹き飛ばすのはユニークで面白かった
- ・葉っぱのパフォーマンスで小さい子たちと一緒に楽しめた事が一番良かった。普段ふれあう機会がないので楽しかった

全体

- ・少し暑さを忘れられる全体の雰囲気
- ・祭りそのもの
- ・灯籠の数が多かった
- ・人が思いのほか集まっていたこと

- ・第1回目としてはすばらしかった
- ・松並木の存在の大きさ
- ・並木の良さをとても良くPRできていた
- ・夜の松並木が幻想的ですてき
- ・香りが出ていたので良かった
- ・初めての祭りに若い人達がいい働きをしていて感心した
- ・歩いてみて松の木の大きさと歴史を思い起こした竹のろうそくが美しい
- ・数多くの明かりの数で準備なされた方々の大変さがわかる
- ・ゆっくり歩くのに良かった
- ・色んな工夫をお金をかけずにやっていたところがよい
- ・色々と遊べるところがあった
- ・竹の切り方で明かりの見え方が違うので、斜め切りが良いと思う。着眼点はすごく良いと思う（企画）
来年は音楽をもうすこし増やしてもよいのでは？
- ・道路中央に置いてあると歩きにくい。民家の窓から明かりがもれない様協力してもらおうと良い。松のライトアップは数を減らした方がいい

こうしてみると来場者は鑑賞の着眼点として、ライトアップされた空間を楽しみながら観ていた事がわかる。しかし作品がもつコンテキストや概念を理解し楽しもうとする姿勢は見受けられない。すべて表面的な反応である。これらの来場者に、より深く作品の良さにふれて理解してもらうためには、さらに工夫が必要である。今回はそれぞれの作品の設置場所にスタッフを配備し、作品説明をおこなう予定であったが、予想外の来場者の多さに遂行する事が不可能であった。この点については、鑑賞のためのガイドブックを作成し作品と来場者をより密接に結びつける必要がある。

(3) 心に残ったアーティスト、作品はありますか？

新実・ガラスの作品 19人

桐山・松尾・環境音楽と演奏 9人

佐原・音のインタラクティブな作品 6人

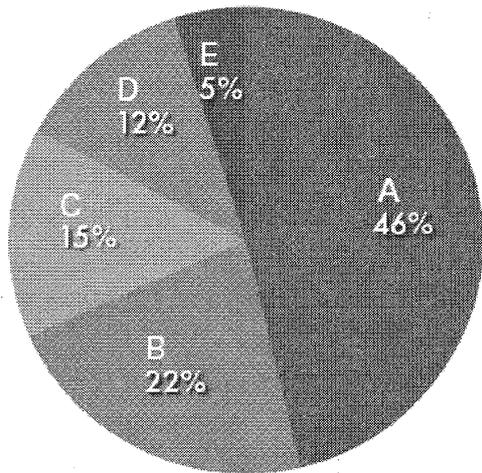
全体・集合した灯 5人

全体・竹の中の金魚 2人

(図8参照)

有効回答数 41名

表2の結果から考察すると、最も来場者の人気を得たのは新実のガラスの作品であった。最も分かりやす



- A ガラスの作品
- B 音楽演奏
- C 音の作品
- D 竹の照明
- E 竹の中の金魚

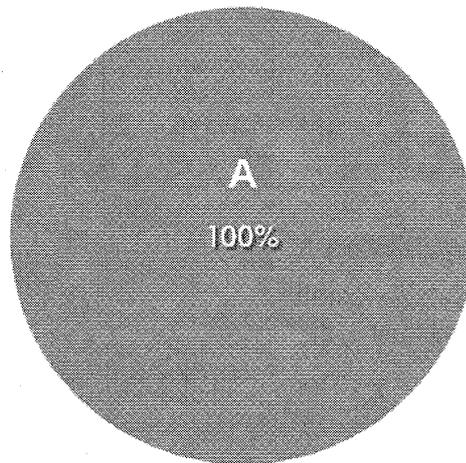
図8. 心に残った作品

い作品であり、見た目に美しく、こどもから大人まで楽しめる要素が大きい事が理由であろう。第二に人気を得たのは音楽演奏である。竜笛やシンセサイザーによる環境音楽や、童謡の演奏が特に多くの年代の情緒感に訴えかけた事が要因であろう。第三番目は佐原の音の反響効果を利用したインタラクティブな作品である。手を叩くという単純な行為で音の反響をもたらせ、簡単に大きな変化を起こす事がわかりやすく、受け入れられた要因であると考えられる。竹の照明はそれらに続く人気となっており、竹筒の中の金魚も同様に人気を得たようである。その他のアーティストの作品への記入は見受けられなかった。

総合的に、わかりやすく誰もが楽しめる作品が人気を得たようである。これらはあくまで来場者の人気や受け入れられやすさの統計であり、主催者側の情報、文化を発信する意向とは必ずしも一致しない。よって、人気を得ている作品が良い、悪いという結論に安易に結びつけるのではなく、あくまで現在の来場者のイベントへの理解として捉えたい。今後の課題として、アーティスト、主催者が文化の向上意識をしっかりと持ち、来場者にわかりやすく説明する意思確認と具体的な実行案を出す必要がある。

(4) てらしまつりを今後続けることに賛成・反対ですか？

100名のアンケート調査で100名の方が賛成の意見であった。



- A 賛成

図9. てらしまつりを継続する事への賛否

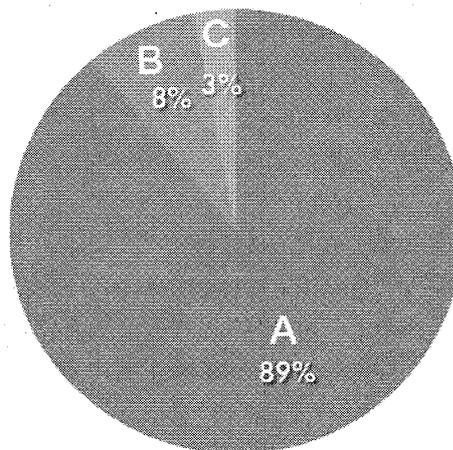
有効回答数 100名

(図9参照)

今回のイベントに対して、回答者全員が継続してもらいたいという意思をもっているという結果である。今後「てらしまつり」が遊歩道計画に対するPRの核としてのイベントとして位置づけたい。

(5) 将来松並木が遊歩道化になる事について賛成ですか、反対ですか？

反対がほぼ9割の89名、賛成は8名、無記入が3名であった。



- A 賛成
- B 反対
- C どちらでもよい

図10. 御油の松並木の遊歩道化への賛否

有効回答数 100名

(図10参照)

多くの方が賛成している。しかしながら反対意見も見受けられる。反対と意思表示していただいた方の意見を以下にまとめる。

- ・街の人の通行を可能にしてもらいたい。
- ・トラックの通行はやめてもらいたい。
- ・すぐ近くに住んでいて生活道である。

大きな要因として迂回路の設営の旨がしっかりと伝わっていなかった事が考えられる。住民の生活の拠点である事をしっかり理解し、確実な打開案を提示しなければ受け入れられないであろう。歩行者天国の実験的实施や、その際に設ける迂回路の試行など、様々な検証が必要である。

(6) その他のご意見

肯定的意見

- ・シンセサイザーは初めて聞いた、良いと思う
- ・竹のランタンを自分で置けたのが良かった
- ・期待していた以上
- ・すごくきれいだった。感動した
- ・先祖も喜んでいる
- ・人が集まる機会が出来た。良かった
- ・松並木が好きになった
- ・企画力のある人物がいるのがわかる

否定的意見

- ・本部でタバコをすっている不届きものがいた
- ・足下が観にくい
- ・宣伝不足であった
- ・蚊が多い。もっと涼しいときでもいいのでは
- ・アーティストなどいない
- ・金儲けは良くない

次回に期待すること

- ・大きい明かりを少しおいてみたらどうでしょうか？
- ・もう少し明るい方が良かった。
- ・並木橋の上のキャンドルは斜めに切るべき
- ・松の木の照明をより明るくしてもらいたい
- ・昼間もやってもらいたい
- ・吊るし行灯でもきれいではないか
- ・灯がバラバラなのでよりまとまりが在ると良い
- ・ベビーカーが通れるようにして欲しい
- ・堤防の上もやるとよい

- ・もっと参加型のものが良い
- ・地域の小学生も参加できると良い
- ・続ける事をしてほしい
- ・今後に期待している
- ・演奏を続けて欲しい
- ・赤坂地区まで続いて欲しい
- ・早く遊歩道化して欲しい
- ・もっとゲームなどのイベントがあると良い
- ・日本の新しい文化の創世を
- ・出店のメニューを増やして欲しい
- ・松が年々枯れている。残してほしい
- ・日曜日は歩行者天国にして欲しい

ベビーカーや、不自由な方への配慮が足りなかった事が伺えた。今後はユニバーサルデザインの観点からもよく検討し、歩行路の確保、歩行路の十分な照度の確保につとめたい。さらには地域の学校などと協力し、より参加型のイベントを目指したい。主催者側の素行の不良が見受けられた事は残念である。よりいっそう注意を喚起し意識を高める事が必要である。また年齢別に意見をまとめる必要がある。今回のアンケートでは年齢を記入する欄を設けていなかったが、次のアンケート要旨には年齢を記入する欄を設け、年代ごとの統計を取る事を検討したい。

5. 教育的意義の考察

「東海道中てらしまつり」を含めた、愛知県の三河地区でおこなわれたイベントを起点に生涯教育的地域美術教育を考えたい。問題点として考えられるのは美術館に収蔵されている作品群と実際にイベントで提示される作品群との方向性の違いである。三河地区には豊橋私立美術館や豊川の桜ヶ丘ミュージアム、岡崎市立博物館など様々な市営の美術文化施設に相当する施設が在る。これらに収蔵されている作品や企画展を含めてみても、コンセプチュアルな作品を扱う例は少ない。愛知県では愛知県美術館、豊田市美術館、名古屋市美術館などに出向かなければ、20世紀以降の一連の美術作品群に触れる事が難しい環境である。これら背景には作品の価値が定まりにくい点や、展示の問題、作品がもつ場所の意義の問題が在る。特にパブリックアートの分野では作家は作品を野外に設置する事で、その場所の意味を取り込んだ作品をつくることが多い。その場所に展示するからこそ意義のあるといえる作品が存在する。美術館ではそれらの作品を展示パネ

ルとして紹介する事はあっても、作品自体を展示する事は無いのである。多くの現代作家は美術館ではなく野外や、都市の景観のなかで新しい作品を設置し、表現をする機会をもち新しい意義を見いだそうとするようになった。そういった新たな価値を鑑賞者に対してわかりやすく提示し、新しい美術作品の楽しみ方、理解の仕方を考察しなければならない。

3時間のイベントにも関わらず3000人を超える来客者数が得られた。このような機会を美術教育と結びつけて地域の文化レベルを引き上げることが、より意義深い社会生活を営む機会となる事は明白であると考えられる。

今後の課題として、地域のイベントとの交流を盛んにし、他の野外美術展、都市型イベントとの連携が必要であろう。東三河地区の各地で単発でのイベントが催されるのではなく、地域全体の文化レベル向上の枠組みの中で考察する必要がある。また、作品の鑑賞力の向上機会をもつ事によって、鑑賞者は、より深く光や空間を生かした作品を楽しみ、松並木を新たな癒し、憩いの場とし、その価値を高めたい。具体的には20世紀美術の中で扱われたコンセプチュアル・アート、アンフォルメル、アースワーク、パブリックアートで扱われた良さを抽出した要領を用意し、地域型美術教育の教材としたい。さらには継続可能な活動も必要である。地域の中でより松並木が日常の憩いの場、癒しの場として定着するように、歩行者天国化やあいさつ運動、持続可能な企画の推進など新たなアイデアが必要である。

終わりに

てらしまつりが地域の活性化につながり、さらには生涯教育的観点から地域の文化レベルの向上につながるべく在りたい。そこでこのイベントを地域交流の活性化の中心と考え、癒しの空間を提供するとともに、一過性のイベントとして終わらず、持続可能性のある地域活性のためのイベントとして位置づけられなければならない。年間を通じて、松並木での活動計画を立て、戦略的に問題発見をし、解決手順を見いだす事が肝要である。また、地域の美術教育という観点から考察すれば、作品を鑑賞する際のガイドブックの作成や、新しい美術の概念を伝える作業が必要であろう。それによって鑑賞者がより深く美術作品を鑑賞し愛好する心情を育む事につながるのではないか。そして、松並木という場が地域の文化交流の中心として位置づ

けられ、その希少性が理解され、将来的な遊歩道計画の推進につながる事を期待したい。

こうしたイベントは地域で同時多発的に、かつ持続的に派生しなくてはムーブメントとして存在し得ない。1つの美術ムーブメントとしてイベントが機能し、地域を巻き込んだものになることによって、20世紀以降の現代美術と呼称される美術の招いた一般世相との美術概念の格差の解消につながる事になると期待したい。そこには美術教育的アプローチが必要であり、作家、美術キュレーターのみでなく、美術教育関係者がより多く携わっていく事を期待したい。

参考文献

- 1) 平成18年度版, 中学校学習指導要領, 第6節, 美術, 166-174 (2004).
- 2) 現代美術の運動・動向・様式,
<http://www.dnp.co.jp/artscape/reference/artwords/movement.html> より2006年10月20日検索.
- 3) 鈴木敏春, 野外美術展の系譜, 名古屋造形芸術大学紀要, 平成18年12号 抜刷 (2006).
- 4) Habbs JA, Rush JC, The Language of Art, Teaching Children Art, 228-255 (1997).